

表現の自由って何だろう？

福井市灯明寺中学校 三年 石田愛悠

「日本国憲法第二十一条では集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する、とあります。これは自由権の一つですね。」公民の授業で先生が説明する。

「えっ」

私は誰にも聞こえないように小さく驚いた。ある言葉が私の心に引っかかる気がした。

――表現の自由――

私は前の席に座る友達の背中をじっと見つめてしまった。私を含め、同じ中学校に通う生徒、先生はその友達の声を一度も聞いたことがない。だから、その友達には「はい」か「いいえ」で答えられる質問をし、コミュニケーションを図っている。うなずいたり、瞬きをしたり、繋いだ手を握ったり、友達は私たちの問いかけにこうして答える学校生活を、小学校からの九年間送っている。誰も話すことを強制しないし、責めもしない。しかし、「はい」と「いいえ」の学校生活を送る友達に、表現の

自由はあるのか、とどこか腑に落ちない自分がいた。

そんな夏、私は動画サイトであるドキュメンタリー番組を見つけた。それは、緊張や不安によって人前で話せなくなる、場面緘黙症という特性を持った十四歳の少女の話だった。家族以外の人の前では一言も話せない。一方で、趣味のお菓子作りに没頭し、自身のお菓子工房を母と経営していた。緘黙症を少しでも改善するために、お菓子工房には半透明のアクリル板を設置し、来店したお客さんにお菓子を作る姿を見てもらう、という工夫をしていた。場面緘黙症という名の症状は私の友達に似通っていた。もしかしたら、友達も同じ緘黙症なのかもしれない、だから話せないのかもしれない。頭に過った。それならこれからも「はい」と「いいえ」だけの友達でいいじゃないか、と。

しかし、この私の考えは当の友達によって覆された。友達と私は吹奏楽部に所属し、同じ打楽器パートを担当している。コンテストに向けての練習に励む中で、私は、自分の音に自信が持てなかった。そこで、友達はどう叩いているのかなあという半ば軽い気持ちで、一緒に同じ部分を叩いてみた。すると、友達の音から「私（友達）はこう叩きたいんだ。どうかな？」という優しい心の声が聴こえた気がした。友達は私に音で教えてくれた。友

達の音は私の支えになり、成長し、自信に繋ぐことへの大切なきっかけになった。それからひたむきに友達の音を聴くようになった。そうしているうちに自分にはない友達のある面に気付いた。それは一曲の中でいくつもの音を使い分けているということだ。ゆっくりとした静かな場面では、包み込むような優しい音を、強くて激しい場面では、一糸乱れぬ鋭い音を、クライマックスに向かう場面では、力を振り絞った熱意の溢れる音を。「はい」と「いいえ」という二択を超えた世界への、大きな一歩を友達は踏み出していた。

表現することは、言葉で話すことだと思っていた。私は人とおしゃべりをするのが大好きで、自分の気持ちを誰かに伝えようとすれば、とにかく話す。それが自分の中での普通だ。しかし、私の友達は「はい」と「いいえ」で持っても、音で持っても自分を表現している。ドキュメンタリー番組の少女はお菓子作りの過程をお客さんに知ってもらうことで自分を表現している。私は学んだ。私にとって、友達にとって、少女にとって、それぞれの表現の仕方がそれぞれの当たり前なのだ。表現の自由とは、人の数だけ普通がある、人の数だけ表現の仕方がある、みんなちがってみんない、そういうことなのだ、と。表現の自由はなんて素晴らしい権利なのだ、

と。

しかし、他者の決めつけが素晴らしい表現の自由、という権利を不自由なものにしてしまうことがある。私は、友達が障がいを持っているかもしれないから話せないのだ、と決めつけていた。私は友達のたった一つに過ぎない姿を友達の全てだと思っていた。そして私は私自身の決めつけによって友達の持っている輝かしい姿に長い間気付くことができなかった。他者の「できる」「できない」を自分の当たり前前の基準で決めつけることは、知らず知らずのうちに、人を無意識に傷つけたり、人が踏み出した大きな一步を踏みつけてしまったりする。

私はこれからたくさんの人と出会い、さまざまな表現をする人と関わりを持っていく。その中で、自分と違ったり、「あれっ」と思ったりすることもあるだろう。そんなとき、「いろいろな表現の仕方があっていいんだよ」と真っ先に人を認められる自分でありたい。そして、温かい目で、温かい声を掛けられる人が増える社会になることを心から願っている。

私は今日も友達の音を一番近くでひたむきに聴き続ける。